13
2132
91

2132
91

序

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

廊の詞にて宮ゐをとゝ物ゐう畧稱
つゝて山ゐんすゐゐゐすゝゐ郎りゐざん
はざんをゝ郎りざんすを猫めゝざす
ゝ鳥ゐ山ゐの一ゐんを迷をゐりゝをめ
おゐゐんゝ稱ゝ出ゐゐゐる猫ば
きゐゐ一やるゝゐゐ平が所通人

生ゐゐゐゐゐゐゐの詞おゐ弥
ゐのるゐ流やゐゐ一ゐゐるゐゐや
よゐ川をゐ流川の詞をかゐゐめゐ
二ゐゐ行の二屋んめの情をゐるゐを
人ゐゐみて詞の我古混新を弱じ
強ゐるゐゐゐとゐの志ゐゐゐ、強弟ゐの

ふるさとに　ゆうなくくるを　とまりとす

漁人門生

坂海堂

夫はらく我身を観ずれハ今ハ予が骨
九ハ巨燈と色ずと銭ゝ兎鼻の先
は西上人の菩提ゆゑ水ゝの玉
水をかの手事に近ゝ仏法蓮華経二八の
仏意事を出ちゝすハ孤ぬ
人や弟ふらん言説すに似ゝ古坐小李

は近きたゝ張の樂をあゝ仏今ハ如し
鋼〻歯みがきを半ひ月代ハ蠅が羽四
てゝも大ぞう姫の腰ちくとん屁三ツ布壷
のう〻に蓋蓋乃引掾にあづり狸藻陸
絶よひぐくアノ瓜漬ものあゝ耳の垢不と海
苔多る腰のあゞ出さしがきの腰かゝ紙の

上張の破きよう掾〻彩をさゝ出きゝを
中と長丈紺の風呂敷包を者より多る
漢が忽然とあゝ手ツイと持ていゝれしハ
考るに油上ゝ事ゝ弟蕭近き古木
あれし共仏の茶碗あれバ再ひ若やがなる
時の仏地〻て焼しゝれバ比一事を茶の必勇

に古地をへうしを立まして面〻まあてあき
ちらく樣〻ものしあし洒落〻云訳を作
丈事志〻也

作者自序

里見八犬

居續夜話 始末 松二筋目

越路の俗人 著

夜の雪の巣のうちにあくも思ひおもひ
忘ぢにして彼泣百の為あくばうき月にあ
のゞ悔しくて思ひ出あし松山もさすがに内

庵の前の夏草ハ又の下にまでうち茂るん也しるく
さしうつむきて居れば日の七ツの時斗ゞ鶯
比叡山の庵の声コホンリ　亭主義経コレサそんぶ
にうつむいて居ぢとふうらいかさのもをきてゐ
今更石の沢でハ申し梶久さんのあとに付て
山ぢの志ゝつハ三おいらゝよりあさましい

やうだいをする男にひきうけて見ると謀ふ
まぶうゐるぞそれ又あの松が枝までも見ふれ
雪ハ同じ雪ゝ　ゐん座のちゝ　名ゐいおいらん
に初ぶらうと不沙かげでハ唱をしうるぞ
それハさて置へよんぢハ別のるぢゃアねい今
山おいら支姫ぢこのむるをナント支ぶけてこれる

むし
ちど
仲の丁の
りきを
ふく
道ぶ
ちゅう
着物
きもん
引
ふくづる
雪解
よきげ
うな
作者自画

家ハねいろの　とうてうろう
うるこしぶホ　松山　おりひのみらのあつがふさん
ゆとあいさらもぐつくらと
ものをいうとうしがよあつく　あゼそんるにあらさまつくるの
をとつせいすう　ひき　こみの時ろう　これ　ときまでとそもるん
と古男ごんよおつくさ　ゑ　でざんすあをぞんる事
あらと分にうかつくるのあらそれまでもなく
ゑをこふしろしい　ゑ　ゑ　ゑ

さるめいもあいらんにハ誠に人の及ハぬ志んせ
つものゞ代三年月松山をでゝしくと一すじに
おもて伝ゝ伝ゝ伝ゝまでゝ心をつけあまさゝ師
ハあんまりこちにあり過て弓はおいつの志ん
ろうにて皆ちげいもあようとするをなぐめ
すゝすゝ志ん〻どつやたゞめいも今〻義の姫未
まだ〻〻〻

いろ〳〵とこゝろつくし　むまがどきく　いとゝいし
さがマアそれで　器つきいしこと　[意]　そふあるそふ奇
るすさテ　おいらん今　夫婦　していふさとをとる
く　ぜてられちやア　せろくの　志が　水に　ものるこ
ゝ　ゆんざ　さんな　愛での　ものしハおいらふさと
も　富貴をそ　ふれていふ〳〵　おいらんも　又　ま乙

の二字をさつ〳〵と　脇へのけてきろねがあらぬ
アノ　ほん久さんの　るすふついてるが　日あで　一ろ〳〵十
ものでの　ほけ　合を　ほるれと　思つて　横合ろ　欲
さんざめもあり　又　さにを　ほつて　居るお　故
あどい　表方の　為を　あんじて　閉く　吐しこるす
もあつれど　倉船　科の　中の　科あり　教訓ハ

又むかしこう俗ているう　あごにもあるそうあり獣の
かくしやうこ中といふものハ中くそのいんぐらい
でおりいきこれるもんじやア福いがそりやア先
ごとでも同じこうまさそこでちんと死ちゐふと
思ふまんちつをるんとこうの左にきりけいてりつ
ハよ信ちつのようふようする糸ハねいうへを

おいうまさたみどらい命のおーいのを死のふ
と思信しこのハ思ふ人へのまんどつあぐーー死でふ
こつて不ゐるよるゐるぐそこちを無て居てこどぎよ死
ぬのろへ結るに志よ世の福いおいこんのるぐこう
思めーーこきめいぐよするのでふあるめいぐこーー又
おの世でそとれぬ悪縁あふべ未来で夫婦ふろ

ふなぐ〜ものをかけるうへそんあるのるらばあり
もつての外のきてぶぜ殿ていそぐ女房の身で
夫よ先ぐらいたふたづれと翁あるりでゑく
八大地ぐくの責をうけるぞいつまでもくそのの
やようまぶ久さんのるどころじゃあるの
めいそふしてそんると却てつみを作りうして

十一

やるやふおもんさちんでもあの人が逢をいさり
ゝめるうちハ腰がやさ京にあがるまでも生ちあぐら
へてをるぐそんとうのるすでそ〜て又出人の名ん
ハめりやすにも思ふにそんでありぬよとゝふられど
あ可ア よくあきらめてありあもんくサその位
あら結ぶの神さ思や浜ゝ名の平閑さ思ハ何の役

に為ぬとてもんぜ候そよろこて赤ぢう
八文殿にあるとゆふけでもねいがマアくあんホ
してもおいらハ外あるばこのやうにもつて居て
おいらが内の松山といふちやア江戸中、おろう新
町や浦原抵宅を所でもどれきるぬ人ハねい
金ぜにあるとあるばいかほうも人ぜい

十二

でこ平宅ハまぐよつぽどかつて、居れどもあいぐ
も女房のかをこくあれと内くしてるのでは節分客人
ぐ舟しつくあるばかのまゑんきぐ結つて居よふぐまよ
あけきやてやらふといつぐるのぐそれぐあ我先
ぐ来つて居て見ごろにかるもんろ仏事も
ほうくほうにハ、ねいかどよ死るずに居

て立流まちんどうをあつせやるつりさを
くふうハ面々のうち今戸の寮へいつてそして
あつちこつちハ病家廻寮へつゝ引まつこれが
ゝふく 世話ばよろくありまつことハ分に
まつ引やア 友方のあるで万金のたつり事ゞ又
松ぐもの事もつれていくがよろろう 出ハ黄病

のあんさんとアこ二ちゃハちゃくも
ゝどもあれちやアまつハ病家に
して係るゞよのかろう をかしてゝ
と 鬱症ゞゝくゝ家ゝよりにやるとふつりで
加るこのもて今戸へやるのきサアあんとこのみとふ
ハけるゞゝゞゝとぶけてこれる家ハあるのう 祝いのう

と見とりあるまもまんあのいさんをあるぐあぐーにいひまくせられ今いい
大あんあるまのいさんとのいんとのいたきまくまくすあるりげの祝あるいい

老化ー！こそ
あるいあるく 松山 おあるがくまくざんをぐ今きまくまづる
らざんすモラくあすくくいんをきらくて勢を天
ちにいくいやうぐ見やでのるのいやつひくくおあ
あんしまくくやアまことよ完へでもまくりそよ
ざんす と見もぐろ あるれていよ 義 ハテサテそれでいやつくりえさん

あの孝にあるねい 世房 さやまさやくりぐいやさのを
きくまれてのるのあくぐ養へいきあよ 松山 きん
あらミアくとあハやいすまい養へやまいいやう 義
きつとうねやレくくさすぐハ松山さんぐよくきく
まけとあるさアいしやあんきんく 義 ら
くもうれくつてあいきん 男 きあを つまらいて アハ

まゝくこんかにありがたいあるまのあい
だそもしの夜ハもうくとあみる 【ヲヤヤ】 ヤヤとも
向くあるく 【松】 ちんあくうるこうこうハちゆく
いつて祝てあるいやう 【義】 ちんぐらり〳〵

今戸の表

鋼くハあるくさうえる偶田川向ての土手
おうて三圓の面々のくとかすみ客を主い
乳のみりとなる今戸橋の下ハ屋根ふきや横
更紙雑やうあり山門ハ切もれて小屋根
の尾よきえのてる表ハ出開き男みたとけて
彩の表のうくと庇ようえのてされし猫め

ハヒフヘホ出雲の神さんはとかちがゐるも
ちろ〳〵白ゆふつけしろ〳〵紙ハ雲風に戦
ぶと雲に音する風ハ年れの生碎のいひきゝ
ト鶯ヨ　蛙の声　ちろざけ〳〵よろん〳〵
又ちろ〳〵乃年　双六福神すごろく　ちろさの
賽にハ　松山　ちん
の目ちろのさし一まハあけて人形の
きものをこらくて布ちろしが　ヲヤ　ぢきれハちろ人

さんがりてきてちろんちん〳〵さのざよ　松ぐ　ろんは
よく見えてお出ちんきまちもてあそびしの
ヲヤどふいたしハやうろふのすでちろ〳〵ぬ外
のるすでふちおぶてハちろいせんがあのだんにおそろく
うんりちくをちとし丸ん〳〵おいろんの高のぎを三三
幸むぐくたるまれ　松山　ろんにを

ふゞッケ あのはゝおやゝきのおくゝ助さんの事
でいつそやきのちを取きゐんしさうゝまぐれて
おくさんを突ごゝいゝと 校 おうもその時手ぢぐ
ちらゝ隆ていつそさもゝざんゝさうゝ思さんぐ
かるふそんでありいしッケ 山 今おりやてきの毒
でさんすコナその巻巻をろてうんゐんし 校 アイ

十七

ろんゐあいらんゝろさゝーやアあのあくるひうんさん
ぐぢさうぐうんさをあるゝよとゝあんゝゝさゝあれ事ぐ
あんまりあ地ろろてあるいせんゝゝ写て知い
ゝゝよ 山 そこにあるものゝゐんセゐんしゐさしい
モフゐすれてあまいしさ 校 もんゐゝおあようひ
いせう ときの中ゝみ歳よ
ゝぢゝろんをざゝてゐさゝーがよんでおきら

セヤいせう 山 ヲすてすん あ〜ようできるせ
校 アイ おき〜ゐんしと 根の ゐぎー にて〜ぎ
ゐきゐぐ〜ようみちぢめる
客ハ九別のみて〜色おとを 名ハ器助あいう
ハ屋をみて客ハ杉山いうておいそれすのこ
山 にくらいう 校 ヲホ〜〜〜〜おいそれすのゐう愛ゐ又
外にゐぢをの客人かべの久兵衛とそいうきもく

名代だろうくらつて 場るすてそんあり
山 うべの久兵衛 はるいる 校 ヲあ〜〜〜〜場るす
こそんあり今青表人ともにあち合ゐ 松山
そ仲さんへもんやもまるあの久兵衛あぐきい
〜〜ヨいうと表くぎんす 三郎 ようく〜ぢゐ
あうあうもぬとあぢをぢうてん

久兵衛　こいろうもあるよりちかるあづをちろ

きいろさんもあどんど床の中さにあるすせも

よろ〳〵　一ぢくもあつちさ　たつていきか

きれ　松山　あるにあるいす客人でもまろちやア

ぬ〳〵のそでをたまれまろちぶんや　こくゆ

ねいどろん世帯ちろるあア　てらワラ

そりんつるかてろいふんでもあろ孫どぶん

うすこてふどもある客ぶやちてもむぞふ

ぶつてやるぶ石んのるすろんカア一ぢくも客

の床さくたろてふろ〳〵やんせ〳〵　松山　まま

へさんのよう世帯みのまろる客人ふおを

ぎのしどくでいろ幸いちん　こく　すらさていろ

しやん上すあ（久兵が処へやる） 松山 久さん〳〵さそ待

ぞふでもあん〳〵らふそ〳〵きもんす爰

ホ代だろうで洋よまきのぐくぎんす

久兵 あるくいとんすきこちやもんが庇

ものでもおしいそうぐらうと今夜も宝

めくこくぼしとゆくぐきうきうぐあろう

ろうとけくいるすどやもれいナ小芋のでも

やろうとあのやそうきを拾てきくれどナ

ろうれぐよりあいぐぐくものハモくくとろやそ

一ものんもやるんいふあいぐいそれどやさらモフあ

ちいうんせ祝きるよもくもやどや〳〵 山 小芋をやる

しものふきあんくくにうけて

たりくにうくるあきをする 久 伽をおがきくさるぐくあと

けさいなすじや 山 おまへさんもあぜもそんなあにじや
ろんなすをもつせいす 久 そのいなかいろ狐きこと
もあへさういコリヤとつとモフろくろく 山 アンのよ
ぢきうこいと きぢきつきてろくのすぢもと
まれぢえもいぢ 久 イヤサヨろ
しもなあのいよ 猫こそこんせるもおろくぢんのをひ
うんこあじやうろうぢうせこくこぢんもるろ

もんさじや ろいかしこのさいちく 九列の宝人でこりれ
ありでもいあいもの ちをこくもくもさうのもくぢちと
きこうふきこいて 久 ハイ あるぢでこさうすのすろく
こくヤイ これとなるぢ さくの間のろつめんか ちぢんが愛よ
こ世界ハ ちぢ どこくこくます ちぢくこいきちろこ 山 ハイそれか
ろんぢこすでこぢうすす 温飩がかつこ世界亀ぶ
こくさ 本紙の中くちろこいろこ

やうすいろコラ　あづいまちづくところいおどん
のう　ねいどうちくるのう一丁も　ろあん　おどんうぞ
とめろうのちかいぎ　くさいとりよるたれのこどもは
ちくてくきい　いき　ア、ー　ちかいさんの　ぢ事ぐさいと
おどんらくさ
ちつしやうまますう　ア、ー　ちくどんらーん　ちく
ヒぶア　あとの　ちかいぎ　ちかうんおどんに　ちく

ぶれい　ちんばん
礼　番　おどんナ　日のくるくよりおとうこく
さにちやんーて　待ておるに　まつこう　ちかもち
ん　一刻　もはくるるん　ちかおどんを　ちかーする
いき　ちくゆうつこ　ちくとろろとろろぬぐ
ちくをこつさよりすめくさちくちかさ　ちか山　ちくとくくよりこ
ゆめもろもろるちかざんーくうんにーておうんちんし
とだきつヨいろいとと
ちくめすくきれぐちく　ちく　おどんナ　ちくらとものくさ

てんぢしがめつてさどめするそん泊つくいくそん

松山 そんよくうれしんよ うく おどんナ正月の仕

舞してやらずい夜具も多づいきそかうそん

序よ作つくくそうう 松山 そつちやア おまさん

のかうかをいく人はありいせんよ うく そうそちや

久兵衛そいろうがちやんものおとあるけん

そうそんいかさてちやそあじやりいろうまの

そうあそうあそんうん宝あてまぐさとじや

ろう 松山 すんろうまんやろ人系をつきごそて

おめにうけんせうう うく そうよう 松 その

ろう二月の志まいしあ色を うく ようく 松

そこにおあそうそうそうそう

久兵をつきごそて志まよ

松兵 あくぎうで仕義ざんす

杉山 ヲヤ〻〻ちのりろんざんしゝさ 校 ちんるにあつちゝ
こつちゝにおて 山 ろんよぬしゞゑ男で居て 校 ゝて
ゑて 山 校 ゝヘヲヤ〻〻と大ゝこのをするおつ一命の板挿のうへを
描うめねてをよんゝく居るをそつけゝてゝゝい
ちがち 校 あの神ごゞ客人をよゞ声ハヘ 山 ヲヤ客人
ゝア ろんざんす ゑゝ客をよゞのさアレにくちゝいよ
おう 遊てやんろんし 校 アイ とゑヤ拉をきゞゞけ ゝイ〻〻おいら

んへアゝぢらゝ〻〻ざんすが描ゝらのすのあハどれゞ
ごゞいしゞゞゝて今るすハもゞざりいせんゝゝど親のゑのうへ
によゝく似ておゝいす 山 ろんけいせいゝゝゝゝゝれる
男でゝんすのをそれでも子ゝゝハゝゝゝゝ子
をもつてゝんゝゝよおすヨ 校 それゞゝても親あゞりハ
できいせんゝゝゝいす 山 それでも虎の巻の御川

さんハ　とらてうるさくてもまて　三どう　ねがくさんアノコどつうるうの
ぢいさんがめいりいしてあいてこゝやいす　校　ヲヤゞん

さうざんすかゝうつちくつれまかとらうと
そうてアサよくきいていきやかアちつともゑ
んまちよをせずにゐでもそうに夜んあんしと
いつてらうや 三ど アイ とゆくちやでゝく 校 ぎゝくうけてきてあい
らんゝ吳今いあゆきたあゝがゝふぎんす 山 そ
してそうさんゝく 図 アイ 山 ちやうゝんあんゝゝう 校

イ。こまゝうみぎとをまうて腰をうけていゝます。 山
すんあゝゝゝまりぢやゐ夜へつれてきあんちんいつてあい
ゝくゝでゝゝりいちん 校 それゝうてゝそうも越後の手
ゝりでざんすゝゝゝもものいゝぐあゝいゝうゝふあき
よゝふでゝゐにあ まをほどざるやゝるすぢゝうゝち
いす 山 ちゝふあゝりいすゝるあ外に人八左びゝちやく

つれてきるんしか 枝 すんるゝつれてまいりすゝゝ
おゝらぶい勇んすかゝ 山 すつていねい仏ゝいゝ
に 枝 ゝごゝゝおゝぎきゝくるゝゝハゝゝゝゝ おいらんへつれて来いゝゝ
モシゝゝゝさんへおゝゝふいつゝゝゝ 叫ゝゝゝゝさんざ
よゝゝしゞゝおゝ礼をゝんゝいつてゝんゝ 左ゝゝ
ヨヤなゞよゝんよゝぶよゝゝゝゝ

しゝ隣よりぢりてあいあんして暗うれしく思
ひあんしゝろう 吉原 イヤいや書生のそれ書柔てあふ
されハ口もいやたまげさもくくそんねく同お
ぐふつろかろうと高田さツラいぐあまいい病柔ぐ
ときゝまゝさぐねつろそんぐかやすでおいそて
お波ホイ又まんま忘れるぐナニサこの娘もなぜ美く

きそいろろ伺つろろもあれハらちろあいを 山 吉原の句をきいてまいぐ
ぐまの又ふゝく、 桜 ろろさんの長のいぐあるいいろくおいんん
ぐろろ伺しやるミ 吉原 ろそこまやぐれろれむ元八田舎
まんで居ろぐゝ今ろあがいどのふとにあつくくく
もれをとらうろあぐあろかの一杯さあろ
あるい娘ぐ 山 コリヤ むでありいす 題 それでもおいん

の名はよく覚えているんしゝ 吉 だろうくか 校 まゝん
あくゝらくしゞ名八 吉 名ゝて あゝ上にしても 切 かい
うゝゝ 松の木の ゝでお 鶴 をてゝよるか名ゝ
校 ゝこ 山 ゝゝ 松ゞくさんサ 吉 ゝゝんゝゝゝんま
ゝすゝゝゝゝで又 宴 にいゝさるハゝぜよゝゝゝゝゝゞ
松ゝゝ 切 ゞゝいを 校 ゝのをゞゝゞゝゝゝゝん

ゝゝう 内 ゝゝゝゝゝ

このゆがでるごろとあるのみくさをとりのこしき
ぼうろんて梅てきそ今あぐりはて生ぐさ俗ようさ
きまりくさ[illegible]のあるてコラムさあるあぎいあれが[illegible]くこ
ヲイ義ぐんかさあがきそくれあさうくさを今ちうぐく
宮のんけしてさ寄さうさひしいどくくるにもおてきま
しくさのんねくく[illegible]もちがこらくぐんざ四[illegible]

ヲナ あくさセあんし 校 [illegible]

ちまりうくさ
くくさ小雑さ
しくりて
寄の
まりの山
ぼうこくくとい

（久米居山まぐ十五六の時オ[illegible]れども
さすがゴそくい
もあき
自分あり）

校ヲヤおいらんこふーぎさるるぎんす寺のまへ山と
云ばを云れバ 山 波二ぞーと、ハとゝのてねがゞ 校 ろうさんすゝく
そつちゝく高ゝいあんしモこへおいらんこゝくかゝゞ
く 長羽さんやもろみさんのおつせいしこことちと
おつとすれあんしてハすこいせんこゝく わたくしとこのろうを女郎が藤とん
をひいて 十二カ月 ゝゝくせうれてをどるとてもろんと月日の

まををゝおつあんとゝやこう 左 ゝとろんあさいうとである
まいがの一そのたゞんじ寺高ぐんかさ角が契情ろあて
ちゝあらうけさせもゝふーこふとちをちんきーこまば
うふがどもんかあるが招ゝさざーこゝろとなるゞ 山 さゝで販
ゞ立あんせう 校 十三 ろうさんゞぞふーてマア
おいらんを 左 あちゃゞぞふーこゝよろかゝや

いつこにいやあつけふあつて（「はすくあつて」）（ふるべろ〳〵ア、ヤレ〳〵ちん
ぐよ（ア）ほいだろうこんざコラ〳〵）松山さも（ムスメの）娘もあくちや
コラあろうしやんな〳〵（愛）でやくろに（「ちがくるし」）ないぼつて
しとそだふしるもんさコラようふるいつけてんるとけ
（おり）
ばふさもあれがこあみや長（ぜん）屋きもこちぜしのよう
りふやうで娘がごもんるちうこふとそふーさく

ふるときもうべいさもも長屋さもイヤハヤイヤハヤ
さべればさべるわどコラとんざさざりにあるるぶの〳〵
りふやうで（うえん）楼屋へうざいといんで居さもうれよべざ
又うの世しをとろうと（きん）やんでいあんり見けもあ
るスケこうふあつてふあ〳〵ふよるいでりて大見（おやぜん）屋
さもやぢにもんそさるもの（め）お目ねかうてようろう

と嗤し者あいじやあらん 山 モシ いきあんしさう
ごあごえんきんのうんこうのこびきをしておろん
あんしへ後生とおもつて 吉 ヲヤあんごといろつかや
るあてがこうかいごやつていこりやうばの 山
こうさしといつてこうくぶごかこもいてようやさるかし
ておろんあんし 吉 ソラアエア ごかうこうごいいもしま

やうよう今のようあるまいこうこうふおぜよ
にしていのうんごあんまりごずの才覚ごえどもハマア
あんごてこうやつしやれおまへよいよ助者うけさ
きやうべいきあごそれまおまへごのまつこうこて
椀屋でそんごかるのをきこうこうこうこうかく
るのハあるまいア、あれさへ〳〵あるつハきあべいさ

のかんごろうダよろされさら又あのやとを嫌つちく
ごろうころやるつりざうイヤハヤこるさんハ〳〵見ん
〳〵でもおいふとぐおお寺のごろうよんさんのよるか
つ〳〵ちをして居るぐ〳〵ホンま〳〵あつらるいんぐ猪の
「全くハ」でつらいふそぐつ〳〵の皮をこつぷりむいてやろう 枝 ハ
そばでハア〳〵ほにあををにぎりたちつぐ
ひぎをつ〳〵いろうちるろちつのろうとれば 左 きぐ きて ホイこれしろう

よろしてそぐされ娘ナニサ わが枝ろごあんにちるる
ふとをそんまよ来れイぶちろうみるりをいひすと
おらハヤ娘あぜよ〳〵さらよろろてまへうまとび
ことしてそれろおら田舎りんぐスケ はぐぶちろうぐと
あく〳〵ありさうやきう〳〵 枝 ちもぐ おいらんへどるモフく
あををいく〳〵いきうろ
ちつさんいつてそんしぐめちでぐんすうろ命ふ

こずにいいるこーをいくこーいすぞどうんかーてまをん
ゑんし 山 ゑいてきゑいゑるんすゑどうゑーくゑり
いす 隠くとこて文 後ゑやつて見れぶゑとこーにもめし
ハゑをゑへはゑうれてゑんのある中ぶゑのをゑ三なのんと
いゑてよゑまゑつをうゑう とゑんぶゑうゑ 左 とんぶーゑうゑく
ゑれも和山さゑあんぐよいゑゑーやるとかゑといそげぐ

とゑあさゑいのをぶゑんをつくりゑーゑぶーにゑりへアゑだゑるかゑひつれゑるゑりにゑいぐる
ゑのハゑいサアコラさつゑいゑうと機嫌ゑーてゑゑうゑて
ゑぐゑされ眼もゑくゑコラぐゑあーぶんゑうこんゑるがこんゑうに
ゑくゑんぐゑステあのちいさい先さーゑあふも泣ゑく
いやつーーやるゑーもちぐあて打ゑきにあいゑし
て泣ゑてかへつちゑやゑ家にゑゑる 山 あゑぐゑを あいてく ゑんよ

そふざんすると　しとてもあんるしるすでありへ
すコレサ　松ぐさん酒でもちつとれよやんあんしな
枝　アイ
煙草ハちんくしすれば酒うきひをのぐく
玉屋市木と申う酒者あどうたるてさいつ
おさへ　あいねのまと酒くきうきうて今近の

うりさハどこへもう面白ぐぬきのそうはぐみ
三人ともに十ぐうよき機ぐんあり
左　トラくいちごの新酒の盃おどりをそうおどりて
ふんをもそう　山　ソリヤありろくありいやう　枝　アイ
ぶいぶんのぶりいよりてんんあんし　大　ふそこけぶんで
ハやれぐ　とてあぐびをうつ　ちうをきしおりて　田　ぎゃみせん　ジゲジゲジゲン　くくく

ぜんく

とのさまあを菜をとらかんねハいゝぞも

こきやるうんこハ（サマ）ようぎいろ引

さゝぎあいものくらんけりやいゝぞも（小角豆）（ようごとし）

こきやるうんこハ（サマ）（珠数）あをづけるぎゝ引

茶く（大豆をまる）校モフよしあんし山ヲヒ〻ア〻くあんま

りおうくて腹ぐいうふおすヨ左おうしかろがの

いちごも又下の方くいくとあをんらハあぐゝとい

ぐあるコレとふぐゝ又ゝやつしやれとおどる

ひぜんすりだちおとゝもばゝるのんし

あねさあなバ刻や　ねてゝるる（ショウガイナア）

ひやゝしにかゝりてあぐるとゝんぐゝーゝあるくてぐゝらり

とてさぐゝり毛ぐゝけるきんをげちゝうそんぶりくゝとゝ文ゝのの

うちゝのくゝひあやくゝとあくゝらてゝるゝくさきをどゝうれハい

いゝそおどしにれどもきぐゝくゝるれバこゝらぐゝくゝゝハずにゝれい校（もん）つけて

ヲヤ　ろうさんへモシ〳〵　ろうさんへ　ゆがゆるくあるりん
〳〵よ　左　さが　アハ〳〵　ヲヤ〳〵　おぜよしよのバ　コラ
大じのみ〳〵ゆんのふんぞうごまをお開帳
〳〵アハ〳〵〳〵ゆんねん〳〵　年ごろよつ〳〵ステ　毛ごろ
けぶの〳〵ふ　ゆせうにゆんせてさらかまやま〳〵　ふ玉
ぶとあるのて毛をふつとぬいて　ゆ　ふとこうとふつ

左　イン　ヲ　こんぶ〳〵　ゆんぶよごぞうさまなりてふ
こあい〳〵　コラ　ゆ　アノ　ゆ枝や　ゆ山さを大じに
〳〵てあげもせ　枝　アイ　左　ヲヤ　おれが　ゆ　とひろしき
でみがめいあい　枝　ヲ　〳〵ぶ　ゆ　ゆ　ゆ

それみるんしあんざんすくだろうい 左 あんで
もおいアノおれがかんぞうごまざ 山 校 うあこ〜〜 校
目がくれよかろいそぎあんし 左 うくあん
ね姫やそんがかるようぢさ面におくあさて
叶章の伴判をよろせうおねがひヤセ
姫さめと松二の巻目尾

四十尾

蓋東平
記數
多
一至